

2022年10月9日
宮崎中部教会主日礼拝
牧師 乾元美

申命記 6 : 4～5

ローマの信徒への手紙 7 : 18～25

「神が求めておられること」

(ハイデルベルク信仰問答 第一部 人間の悲慘さについて 問 3～5)

※問答は「日々の祈り」をご覧ください。

【黙祷】

【招詞】 ヨハネによる福音書 4 : 23～24

【祈祷】

【聖書】 申命記 6 : 4～5、ローマの信徒への手紙 7 : 18～25

【説教】 「神が求めておられること」

<第一部へ>

聖書の御言葉と信仰の恵みをより深く知るために書かれた『ハイデルベルク信仰問答』という、宗教改革時代の書物があります。先週から、この信仰問答に基づく御言葉の説教が始まりました。今日は、その二回目となります。

まず前回は、この信仰問答の「序章」にあたる、問1と問2を見ました。問1では、ハイデルベルク信仰問答の全体の中心となるテーマが示されました。それは、「慰め」です。

その慰めとは、わたしたちが、真実な救い主イエス・キリストのものである、ということ。そして、イエスさまからわたしたちを引き離すものは何もない、ということです。

そして問2には、この慰めに、わたしたちが生きて死ぬためには、三つのことを知る必要がある、と語られていました。

その一番目が、「どれほどわたしの罪と悲慘が大きいか」についてです。ですから、今日からこの『ハイデルベルク信仰問答』の第一部、「人間の悲慘さについて」に入ります。

その後、あと二つの知らなければならないこと。第二部の「救いについて」、第三部の「感謝について」と続きます。この本の流れは、罪、救い、感謝、と進んでいくのです。

まず、人間の罪と悲慘について語られる。これは、少し気が重く感じられるかも知れません。しかし、わたしたちは自分の罪を知らなければ、なぜ救いが必要なのか、いったい何から救われるのかが分かりません。

キリスト教の救いとは、自分の願いを神さまに叶えてもらうことでもないし、悪い出来事を遠ざけ、良い出来事ばかりが起きるように。成功し、富を得、健康に生きられるように、神さまに願うことでもありません。

キリスト教の救いとは、わたしたちが捕らえられている罪から、解放されること。罪から救い出されることなのです。

では、わたしたちが捕らえられている罪とは何か。ハイデルベルク信仰問答は、まず第一部で、そのことを紐解いていきます。

<罪？>

さて、第一部の最初の間答はこうです。

問3「何によって、あなたは自分の悲惨さに気づきますか。」答「神の律法によってです。」

まず、この最初の間いで面白いのは、この文章の中で、あえて「罪」という言葉を使っていないところです。「何によって、あなたは自分の悲惨さに気づきますか」。ここでは、「悲惨」という言葉しか使われていません。

わたしたちは、ただ「罪」と言われても、実のところそれがよく分からないのではないでしょう。

基本的に、悪いことはしていない、真面目に生きてきた、人に迷惑をかけていない。それで、わたしが罪人であるとは、どういうことなのだろうか。そう思うかも知れません。

あるいは反対に、人を傷つけてしまったことがある。法律を犯してしまったことがある。大きな失敗をしたことがある。わたしは罪人だ。そんな風に、自分の行動の過ちについて、それを罪だと考えている人もいるかも知れません。

わたしたちの社会の中で言えば、確かにそれは「罪」と呼ばれるものでしょう。

しかし、聖書が語る罪は、過ちを犯すことや、秩序を乱すことではなく、もっとその根源にある、わたしたち人間の本質に根付いてしまっている罪のことです。

ここで、ハイデルベルク信仰問答は、「悲惨」という言葉を使って、聖書が語る「罪」のことを教えようとしています。ではまず、この「悲惨」とはどういうことなのでしょう。

<悲惨>

もう一度、問3を見て見ましょう。「何によって、あなたは自分の悲惨さに気づきますか。」

実はこの問いは、もう既にわたしたちが悲惨な状態の中にある、ということが前提になっています。これは、言い換えればこう言っているのです。「あなたは悲惨です。あなたのその悲惨な状態に、あなたはどうやって自分で気付くことができますか」と。

さて、この「悲惨」という言葉。このハイデルベルク信仰問答はドイツ語で書かれたものですが、「悲惨」は「Elend (エーレント)」という言葉が使われています。これは、不幸、孤独、悩み、貧困、という意味でもあります。

しかし、この言葉の語源には、土地から離れた、土地から離された、という意味があるようです。居るべき場所から追放された状態。土地を離れて、出てしまっている状態。

悲惨とは、そのように自分が居るべき場所から離れていることなのです。

聖書も、この居るべき場所を失い、離されてしまう悲惨さを、様々な仕方で語っています。創世記のアダムとエバは、神さまに与えられたエデンの園を追放されてしまいました。神の民イスラエルは、国を滅ぼされ、バビロンに捕囚として連れて行かれました。新約聖書では、ルカによる福音書に放蕩息子のお話があります。自分勝手な思いで父の許を離れた息子が、異国の地で飢饉に遭い、死ぬ思いをします。

ハイデルベルク信仰問答は、わたしたちが、この悲惨さの中にある、と教えているのです。わたしたちは、居るべきところに居ないのだ、と。

では、わたしたちが居るべきところとは、どこだったのでしょうか。

それは、造り主である神さまの御許です。神さまの御許にいるとは、神さまの御言葉に従い、神さまの近くで、神さまと共に生きるということです。

ハイデルベルクは語るのです。あなたは、居るべきところにいない。神さまの御許こそ、あなたが生きるべきところ、あなたが存在すべきところなのに、あなたはそこから遠く離れてしまっている。あなたは、土地を失い、故郷を失い、悲惨の中にいる、と。

そしてここで、「罪」という言葉を見つめてみましょう。罪とは、聖書においては、「目標を失い、道から外れること」、「的を外すこと」を言います。

わたしたちは、神さまに向かって、神さまと共に生きる者として造られました。ですから、本来わたしたちの心は、神さまに真っ直ぐ向かうべきなのです。

それなのに、向くべき方向を向いていない。神さまの方向を見失ってしまう。神さまと共に歩む道から外れ、神さまから離れて行ってしまう。それが「罪」なのです。

その結果、わたしたちは居場所を失い、故郷を失い、「悲惨」な状況に陥っています。

このようにハイデルベルクは、「悲惨」という言葉から、わたしたちの罪とは何かを教えようとしているのです。

<神の律法>

さて、わたしたちは、この悲惨の中にいることを、何によって気づくことができるのでしょうか。

実際のわたしたちは、自分の悲惨な状況に対して、あまりに鈍感なのかも知れません。

神さまから離れて、本来居るべき場所を失っているわたしたちは、本当は休まることのない、落ち着かない、不安定な状態の中で生きているはずです。

それなのに、自分は自由に生きている、自分で自分の道を歩んでいると思い込み、自分の力を信じて歩んでいる。そして、目の前の喜びや楽しみを大切にしている。

それは一見素敵な歩みに見えますが、実は、これではまるで、父の許を出て、自分の好き勝手に放蕩していた、あの息子のような状況です。

あるいは、自分の力で生き抜かなくてはと思って、人と競争をし、成功を求め、走り続けている。あるいは、どこかでつまずき、転んでしまって、もはや動けなくなって、うずくまっている。

そんなわたしたちは、自分の悲惨さに、自分で気づくことでさえ出来なくなっています。悲惨に気づくことにも、わたしたちには神さまの導きが必要なのです。ですから、問3はこのように問うたのです。「何によって、あなたは自分の悲惨さに気づきますか。」

ハイデルベルクは、「神の律法によって」、わたしたちは自分の悲惨さに気づくことが出来ると答えます。

「神の律法」には、神さまがわたしたちに求めておられることが示されています。

つまり、神の律法は、本来わたしたちがどこに居るべきか、どのようにあるべきかを示しているのです。わたしたちが居るべきところ。わたしたちが生きるべきところ。わたしたちが向かうべきところ。神さまが、わたしたちにこうあれと、求めておられる方向はどこか。それを、神の律法が示しています。

では、神の律法は、わたしたちにどうあるべきだと示しているか。それが、問4です。

問4 神の律法は、わたしたちに何を求めていますか。

答 それについてキリストは、マタイによる福音書 22 章で 次のように要約して教えておられます。「『心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし（、力を尽くし）て、あなたの神である主を愛しなさい。』これが最も重要な第一の掟である。第二も、これと同じように重要である。『隣人を自分のように愛しなさい。』律法全体と預言者は、この二つの掟に基づいている。」

神の律法とは、旧約聖書の時代に、イスラエルの民に与えられた神さまの御言葉である「十戒」を意味しています。それを、イエスさまは二つに要約されました。

一つは、神さまを愛すること。もう一つは、隣人を自分のように愛することです。

これが、神さまが語られた、わたしたちに求めておられること、神の律法であり、わたしたちがなすべきこと、生きるべきところなのです。

ある人は、神の律法は、自分の姿を映す鏡のようだと言いました。わたしたちは、自分を理想化した姿を自分で思い描いている。自分を正当化し、自分の正しさを信じ込んでいる。しかし、鏡の前に立つと、ありのままの自分の姿が映し出されるのです。その鏡こそ、神の律法です。神を愛しなさい。隣人を自分のように愛しなさい。それは、神を愛することの出来ない、隣人を愛することの出来ない、自分の本当の罪の姿を映し出します。

いや、わたしは隣人を愛している、という方があるかも知れません。しかし、隣人とは、自分を愛してくれる人や、自分が好きな人のことではありません。自分を愛してくれる人を愛することや、自分が大切に思っている人を愛することは、比較的、出来るのです。

新約聖書では、イエスさまがこの律法の要約を教えられた時に、ある人が「わたしの隣人とは誰ですか」と尋ねました。そこでイエスさまは、有名な「善いサマリア人」(ルカ 10: 25~37) の話をなさいました。このたとえでイエスさまが教えられたのは、たとえ目の前の人敵であっても、あなたから愛しなさい。隣人は誰かと問うのではなくて、あなたが、その人の隣人になりなさい、ということでした。

…そんなこと、誰が出来るというのでしょうか。

この、神を愛しなさい、隣人を自分のように愛しなさい、という神の律法は、決してそのように神を愛することのできない、隣人を愛することのできない自分の罪を映し出します。

神の律法によって、神さまが、このように生きなさいと求めておられる道を外れてしまっている。生きるべきところから離れている。そのようにして、わたしたちは罪によって、悲惨の中に立っているのです。

<無力さ>

ですから、その次の問5は、わたしたちが神の律法に従うことができないことを、はっきりと告白します。

問5 あなたはこれら(つまり、イエスさまが要約なさった、神を愛することと、隣人を愛すること)すべてのことを完全に行うことができますか。

答 できません。なぜなら、わたしは神と自分の隣人を憎む方へと生まれつき心が傾いているからです。

気持ちの良いほど、「できません」とはっきり言い切ります。わたしたちが、完全に神の律法を行なうことが出来る可能性は、全くないのです。わたしたちは、ここで罪に対して全く無力な自分と出会います。どうしようもない悲惨の中にある現実を、はっきりと見つめさせられるのです。

今日読まれたローマの信徒への手紙は、パウロという人が、まさにこの自分の罪の悲惨さを叫んでいるところです。

パウロという伝道者は、イエスさまを信じる前は、とても厳格に律法を守る、ファリサイ派と呼ばれるユダヤ人でした。十戒を一言一句違えずに守り、完璧に律法を守っていると、自他ともに認めることが出来るような人でした。

でもパウロは、イエスさまと出会って、イエスさまの救いの出来事を知って、自分が心の底では神さまの求めておられることに背いていたこと。神の律法に従うつもりでしていたことが、実は、神さまの御心に背く行いになっていたことを知るのです。そうして、律法を守るためにしたことによって、兄弟を傷つけ、隣人となるべき人を殺しさえしました。

パウロは、神の律法に示されたことを、形式的には完全に守ってしまっていた。しかし、その根っここのところでは神さまの御心に背いてしまっていたこと。心から神を愛すること、隣人を愛することができていなかった、自分の本当の罪を思い知ったのです。

善いことをしようとしても、それでも自分のどこかに悪が付きまわっていて、罪を犯してしまう。どうやっても神の求めておられることに応えることが出来ない。罪に支配されてしまっている。パウロはそんな自分の罪を見つめます。

問5の答えにあったように、「わたしは神と自分の隣人を憎む方へと生まれつき心が傾いて」しまっているのです。自分では、もうどうすることも出来ない罪なのです。

7:24では、パウロは「わたしはなんと惨めな人間なのでしょう」と、悲痛な叫びをあげています。そして、この叫びは、わたしたちすべての人間の叫びなのです。

このように、わたしたちを悲惨さへと追いやる罪が、神さまから遠く離れさせる罪が、わたしたちの存在の根底に根差してしまっているのです。

ですからこの罪は、もはや自分では、どれだけ努力をいても、修行をしても、決意を固めても、解決することが出来ないのです。

今日の所でハイデルベルク信仰問答は、このようなわたしたちの悲惨さを、そして、その悲惨さをもたらす罪を、しっかり見つめさせようとしているのです。

<救いと感謝へ>

しかし、もちろんこれは、次の第二部の「人間の救いについて」と、第三部の「感謝について」を見据えて、ここで押さえておかなければならないこととして語られています。

自分ではどうしようもない、この罪から、救い出して下さる方。わたしたちを神さまの御許へ帰らせて下さる方が、わたしたちには与えられているのです。そして、救われた者の喜びと感謝の生活へと招かれているのです。

今日のローマの信徒への手紙では、パウロが悲惨を叫んだあと、こう続きます。

24~25節、「わたしはなんと惨めな人間なのでしょう。死に定められたこの体から、だれがわたしを救ってくれるのでしょうか。わたしたちの主イエス・キリストを通して神に感謝いたします。このように、わたし自身は心では神の律法に仕えています、肉では罪の法則に仕えているのです。」

途中から急に、「わたしたちの主イエス・キリストを通して神に感謝いたします。」と出て来ました。この罪の悲惨さの只中に、まさに、神さまがわたしたちの救い主、イエス・キリストを遣わして下さり、神さまの御許に帰るための道を示して下さったからです。

神さまはまず、御子イエスさまによって、ご自分のわたしたちへの愛を、はっきりと示して下さいました。それはわたしたちが、神さまに背き、逆らい、敵対し、道を外して離れて行ったにもかかわらず、それでも十字架によって愛する御子イエスさまの命を惜しまず与えて下さるほどの愛だったのです。

造られたわたしたちを、神さまが愛して下さいていること。悲惨な罪の中にあるわたしたちを、神さまに背き、敵対し、遠く離れてしまったわたしたちを、それでも神さまが最後まで愛し通して下さいること。

敵対する者を愛し、その隣人となって下さったのは、他ならない、神の御子イエスさまでした。このイエスさまによってこそ、わたしたちは罪と悲惨の中から救い出されるのです。

【お祈り】

天の父なる神さま

わたしたちの主イエス・キリストを通して、あなたに感謝いたします。

道を外し、神さまの求めておられることに背き、神さまを、隣人を、愛することが出来ない罪と悲惨の中にいるわたしたちを、それでもあなたは愛して下さい、救いの道をイエスさまによって示して下さいました。

わたしたちが自分の罪に気づき、イエスさまが備えて下さった十字架と復活の救いの道を通して、あなたの御許に立ち帰ることが出来るように導いて下さい。

このお祈りを主イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。アーメン

【讃美歌】 483 「わが主イエスよ、ひたすら」

【信仰告白】 使徒信条

【献金】

【主の祈り】

【讃美歌】 29 「天のみ民も」

【祝福】 主があなたを祝福し、あなたを守られるように。

主が御顔を向けてあなたを照らし あなたに恵みを与えられるように。

主が御顔をあなたに向けて あなたに平安を賜るように。

主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、

あなたがた一同と共にあるように。アーメン